

自然環境観育成について（その 2）

広島工業大学 正員 ニ 神 種 弘

1. まえがき

近年、急速かつ大規模な自然環境の破壊や汚染が進み、いろいろな環境問題が生じてきており、種々の対策が考えられている。これらの環境問題解決のために、環境の主要構成要素である自然に関する研究がいろいろとなされてきている。しかしながら、自然の個々の部分に関する研究はいろいろとなされているが、自然環境観といった大局的研究は、かならずしも十分になされているとはいえない現状である。

したがって、前回より始めた本研究シリーズは、大局的な自然環境観の育成について述べていく予定である。前回においては、自然は、分析不可能な（分解すればこわれてもとにもどらない）生命の躍動体であり、この生命の躍動体である自然は、自然人的感覚を持てるように自然にとけこんだ生活をし、我が国古来の伝統的な東洋的（直感的、生命的）自然観想法でもって把握すべきであることについて述べた。

今回は、我が国古来のこの伝統的な東洋観想法が、なぜ明治以後（特に、戦後）急速にすたれていき、西洋的（分析的、死物的）自然観想法にと、かわられたかについて言及し、大局的な自然環境観の育成に欠くことのできない東洋的自然観想法の復活について述べる。

2. 東洋的自然観想法の心—ほとんどとだんだんの心—

明治以前における我が国の教育は天を敬い、自然の摂理に則り、人々の在り方を教えることが主目標であり、教育の仕方も話込み式でなく、あたかも自然の推移がだんだんであるごとく、ゆくりとわずかなことを教えるものであった。ところが、明治維新により、西洋文明の移入と共に学制がしられ学校教育の主目標が欧米列強に互すべく、富国強兵となり、物質偏重の知育教育がなされるようになった。したがって、学校教育は、物質教育における先進国である西欧諸国でおこなわれてきた教育を模倣することとなった。しかし、この模倣の仕方が、非常に知育を偏重したいっぴな話込み教育であった。自然に親しみ、徐々に自然の摂理を知らされるといった教育でなく、科学技術でもって自然を解明し征服していくべきであるといった西洋的教育がおこなわれるようになってきた。そのため、四季の推移を愛で、自然の豊妙不可思議に対し畏敬の念をもつ日本人の魂が、いびつ化されて移入された西洋文明により陵駕されていった。我が国のように狭い国土に多くの人が住んでいるところでは、常に自然に対し十分な配慮を行い、美しい自然の中で生かされているという伝統的心を持ち続ける教育が西洋の物質教育と十分調和してなされるべきであった。

明治から戦前にかけては、上に述べた西洋文明の移入も、ある程度良識を持って受け入れる余裕があったが、戦後は、敗戦による物質貧困により、物質豊富な戦勝国の米国を見るにつけ物質第一の風潮が我が国に行きわたってきた。そのため自然の恩恵に感謝するといった、ほとほとの生活習慣がなくなってきた。

このように、明治維新および特に戦後の物質第一の取り扱い早い話の込み的知育偏重教育により、長時間かけてゆくりと体得すべき生命の躍動体である自然が、あたかも短時間で人知でもって解明できるもののごとく取り扱われるようになった。自然は自然の中ではじめて感得（豊妙不可思議に究極的には人知でもって解明できないことを感得）できるものであるが、自然から離れた知育偏重の教育研究を行えば行くほど、有限の人知があたかも無限の可能性を持つものと錯覚するようになり、自然を省りみることなく、物質中心の風潮を行きわたらせることになる。人知の過信を拍車をかける教育が自然の摂理に則り、ほとんどとだんだんの心を養う教育をほとんど駆逐してしまったことが、自然の大幅な不可逆的破壊をもたらしたことを深く反省し、今後は、自然の摂理を感得する

ための長い時間と努力の必要な教育研究が行われなければならない。自然の摂理を感得するには、自然の推移がそうであるようにほどほどにだんだんの心（東洋的自然感想法の心）を自然の中で養う必要がある。

3. 大家族制と三つ子の魂百まで

著者は、東洋的自然感想法の育成者となるべし（まず著者自身を育成すべし）、1977年3月末より、まだわずかの年間であるが、広島県佐伯郡五日市町の極楽寺山麓の休耕田を利用し、自然農法を行って自然環境感の体得に励んできた。この自然環境感体得の性質は、自然は豊妙不可思議で究極において人知で解明できない畏敬すべきものであるという性質である。自然農法を学ぶために、地元の農家や各地の自然農法の先達を訪ねたり、自然農法関係研究会（日本有機農業研究会など）の種々の行事に参加し、以前にこれの前で環境の研究らしきものをしていった時には得られなかった感動と東洋的自然環境観育成のためのいろいろなヒントを与えられ、東洋的自然環境観の育成において、大家族制度の重大な意義を教えられてきた。現今の農家は、昔と違って大家族制度がかなり崩壊しているが、それでも都会の核家族のように決定的崩壊をしていない。祖父母・父母・子供の3世代が協力しあって自然の中で生活している農家がいくらかは残っている。にまたま、ここ2、3年来そのような農家と接触する機会があり、そのような農家の子供が、都会の核家族の子供にはみられない素朴でほのぼのとした雰囲気を持っておることに感動した。このような子供の情操豊かな雰囲気は自然や人生の経験豊かな祖父母の背中（あるいはひざの上で）幼少期を過ごすことにより、老人のほどほどにだんだんの起居振舞（これは自然の推移と同じである）を知らず知らずのうちに身につけたことによるものと思われる。若い父母と子供のみが生活している核家族においては、若い父母は人生の肉体的最盛期にあるため、人知・人力を過信する傾向があり、自然を慈しむ心とか年老いた者、弱者に対するいたわりの心づかいをなかなか持ちがたいものである。従って、そのような雰囲気の子供は東洋的自然環境観をなかなか身につけがたいものである。近年、自然環境の悪化に伴う種々の弊害を反省し学校教育においても、学校園などを作って、自然を慈しみ、ふるさとを大切にすることも子供に養わせるようになってきた。しかしながら、「三つ子の魂百まで」のごとく自然の摂理に則った魂の教育は、学校での教育も大切であるが、できるかぎり幼少期に行うのがよく、また教育するというおおげさな努力をしなくても済むものである。子供が学校に行く前に、家庭や地域社会の中で自然のいのちを大切にすることがなされなければならない。古い大家族制度においては、色々と弊害もあっただろうが、長い間に祖先から受けつた風土に合った胎教とか乳幼児の仕方がなされ、自然生命や自然の恩恵を大切にする気風が養われたものである。にまたま、本年2月に熊本県小川町であつた第2回有機農業講座に出席し、地元の大家族農家に民宿した際、福岡の安藤琢衛医師より次の話を聞かされた。人間の脳の血管系は、他の体の血管系と独立した機能を持ち、体内に入つた汚染毒物は脳になかなか入って行かないようになっている。にだし、この独立した機能が發揮されるのは5才以上であり、脳の血管系の独立した機能が十分發揮されない胎児や乳幼児において、体内に汚染毒物が入ると、幼少であればあるほど大変なことになる。このような話を聞かされた時、「三つ子の魂百まで」の厳しい意味が解らなうであつた。何事も小一というところが大切で、小一というところは教育といふ大きな努力や経費も不要となる。大家族の中で幼少の頃よりほくまされるうちに自然の中で人々の助けを借りて生かされているという心を養い、自然の摂理を体得する基礎が養われてくつものと思われる。

4. あとがき——明治以後、特に戦後、物質豊かな欧米に心を奪われ、古くから日本のよき風土習慣を粗末にしてきた。例えば住宅計画において、個人のプライバシーを守る余り、極度に核家族化し、その結果、長い間親から子、子から孫（祖父母から孫）へと受けつがれてきた風土に合った、ほどほどにだんだんの生活の仕方が急速に廃れ、自然に対する無感動な子供を多く生み出してきた。これらの子供が知育偏重の詰め込み教育により科学技術を学ばやがて自然環境計画、都市計画、地域計画などの重要な計画に参加するようになることは、大変困つたものである。自然を慈しむ東洋的自然観感復活のため、古くからの日本のよき風土習慣（例えば大家族制度）を再認識し、新しい時代に向つて取り入れていくべきであると思われる。